



TITLE:

ミルの経済學概念

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. ミルの経済學概念. 經濟論叢 1927, 24(4): 640-655

ISSUE DATE:

1927-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128529>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷四十二第

行發日一月四年二和昭

## 論叢

古代の港

教授 文學博士

三浦 周行

俱樂部稅論

教授 法學博士

神戸 正雄

ミルの經濟學概念

講師 文學博士

米田 庄太郎

歷史學派の先リチャード・ジョーンズ

東北帝國大學  
教授 經濟學士

堀 經夫

## 時論

日本の對支好意政策の境界

教授 文學博士

矢野 仁一

海軍制限に關する米國の提議

教授 法學博士

末廣 重雄

## 說苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

産業としての林業の本質

教授 經濟學士

平田 憲夫

パンタレオニの經濟學基礎概念

經濟學士

松岡 孝兒

## 雜錄

印度の雨

教授 法學博士

財部 靜治

## ミルの經濟學概念

米田庄太郎

### (一) 經濟學の自律性問題

ミルが前號「ミルの社會學概念」中に述べし如くに、一般的社會科學として社會學の概念を樹立したるは、つまりはコントの社會學論の影響によるのである。(此の事に就て從來問題はあるが、後に別に論述することとする。) 然る

にコントは社會生活の何れの方面も、或は社會現象の何れの部類も、之を全體との關係から切り離して單獨に考察するに於ては、到底正當に認識し得られるものでなく、只全體との關係に於て考察するに於て、始めて正當に認識し得られるものであるから、社會の科學的研究は先づ其の全體的一般の考察から始め、然る後に部分的考察に進む可きであると考へ、そうして社會の全體に注目せずして只其の一方面を切り離して研究することが、到底正當なる科學的認識を與へ得ないものなるを論證する一例として、殊に古典經濟學を批評したのであるが、其の經濟學批評によりて見ると、彼は社會の科學としては只社會學の存立を認めるだけで、經濟學を始め一切の傳來の社

會科學即ち特殊社會科學の科學的存立を、否定するもの、如く考へ得られる。併し夫れが果してコントの眞意であつたかは問題である。否な余はコントの學問概論上から見て、寧ろそうであるまいと推察する。が、とにかくコントは特に特殊社會科學の科學的存立問題に就て、明亮に論述して居ないから、上に述べしが如くに解されても仕方がないと云ひ得られる。尙ほコントの立場から考へると、假令特殊社會科學の存立を認めるとしても、夫れは全く社會學に依存するものにして、何等科學的自律性を有しないものと考へ得られる。かくてコントの社會學概念の如きものを承認して社會科學論を立てるとすると、經濟學を始め一切の特殊社會科學の自律性は問題となり得るので、又實際上問題となつて論議されるに至つたのである。然るに今ミルは一方に於ては前號に述べし如くに、根本的にはコントの社會學概念を承認して、彼の社會學概念を立てると同時に、他方に於てはやはり根本的に英國傳來の經濟學概念を傳承して、經濟學の自律性を確信して居たのである。然らば彼は社會學に對する經濟學の自律性を、如何に論述したか。少なくとも英米に於ては、彼は此の問題を論述せる最初の學者であると思はれるから、社會科學論の發達上から見て、彼の思想を考究することは、歴史的に甚だ興味あるのみならず、其の後多くの社會學者及び經濟學者は彼の思想を是認して居たのであから、更に今日獨逸に於て盛んに論究されて居る經濟學方法論の上から見ても、彼の思想は重要な意義を有すると思はれるから、此處に彼の思

想を考究することは、現在的にも亦重要な一問題である。尙ほ社會學に對する經濟學の自律性の問題に關するミルの思想は、又彼の社會學概念を嚴密に理解する爲めにも、甚だ重要なものである。併し此の問題に關する彼の思想は、特殊社會科學の論理的・一般性に關する彼の思想に基いて、立てられて居るのであるから、此處に先づ後者から考察し始めることとする。

## (二) 特殊社會科學の論理的・一般性

却説さきに述べし如く、ミルは社會科學の研究法としては、彼が化學的或は實驗的方法と稱するもの、及び幾何學的或は抽象的方法と稱するものを排斥し、そうして彼が物理學的方法或は具體的演繹法と稱するもの、及び歴史的方法或は逆演繹法と稱するものを以て、社會科學に適切な方法と見るのであるが、然るに具體的演繹法及び逆演繹法の如き、其の論理學的性質の相異なれる二方法を以て、均しく社會科學の適切な方法と認めるに於ては、つまり社會科學は論理學的或は方法論的に、根本的に二種に大別されることを承認することになる。其の一は具體的演繹法を用ひて建設される社會科學にして、其の二は逆演繹法或は歴史的方法を用ひて建設される社會科學である。然るに後者は即ち前號に於て述べし如く、一般的社會科學としての社會學であることすれば、前者は即ち特殊社會科學としての經濟學及び其の他の社會科學である可きである。かくて

社會學と特殊社會科學との差別は、論理的方法の上から見れば、つまり逆演繹法と直接演繹法或は具體的演繹法との差別に歸着するのである。そうして逆演繹法によりて建設される社會學の論理的-一般性は、前號に於て述べしが如きものであるが、然らば直接演繹法或は具體的演繹法によりて建設される特殊社會科學の論理的-一般性は、如何なるものであるか。

先づ第一に先天的演繹の一體系として考られる社會科學は、確實なる豫見の科學ではあり得ないで、只傾向の科學であり得るだけであることは明白である。吾人は人性の法則を社會の與へられたる一狀態の諸事情に適用することによりて、特殊的一原因が若し反對原因の作用によりて妨げられるにあらずば、一定の仕方にて作用するであらうと論結し得る、併し吾人は決して、如何なる範圍或は度合まで、其の原因が其の一定の仕方にて作用するであらうかを確知することは出来ない、又反對原因の作用が夫れを妨げないことを、確實に斷言することが出来ない。是れ吾人は其の原因と共存し得る一切の原因を、大凡で認知することさへも出来ないからで、又さほど多くの結合されたる諸原因の集合的結果を測定することは、尙ほさら困難であるからである。しかも豫見には不充分なる知識も、實際の指導に對しては甚だ有益であり得る。全體吾人は個人の事柄と同じく社會の事柄を賢明に處置する爲めには、吾人が吾人の行動の結果を、誤り得ない程確實に豫知すると云ふことは必要でない。吾人は失敗するかも知れない手段によりて、吾人の目

的を達せんと努め、又恐らくは決して起らないかも知れない危険に對して、警戒せねばならない。實際的政治の主旨はつまり、其の傾向の有益なる事情の出来るだけ多數を以て、與へられたる社會を包み、其の傾向の有害なる諸事情を出来るだけ除去し、或は抑制することである。そうして只其等の諸傾向の知識のみが、其等の諸傾向の結合的結果を、精密には豫見することは出来なくとも、かなり大なる度合まで豫見することを可能ならしめるのである。

併し傾向に關してさへも、例外なしに總ての社會に適用される様な命題の多數が、右に述べしが如き仕方にて、設定し得られると考へるは謬見であらう。是れつまり社會現象は非常に變化し易きものにして、更に社會現象が變化される事情が、其の數甚だ多く且つ種々様々であるが爲めである。もつとも社會の上に作用する諸原因は一般的には無數であつても、社會の何れかの一特徴に影響する諸原因の數が定まつて居るならば、右に述べし事はあまり重大な障害とはならないであらう。是れ其の場合には吾人は特定の何れの社會現象をも他から切り離し、そうして他から攪き亂されることなしに其の社會現象の法則を研究し得るからである。然るに實際に於ては事態は其の正反對である。社會的狀態の何れの要素にありても、識別し得られる様な度合で之に影響するものは、總て其の要素を通じて一切の他の諸要素に影響するのである。總ての社會現象は諸法則の交叉によりて產出されるので、吾人は一の社會の狀態を何れの關係に於て取扱ふとも、

同時に他の總ての關係に於て之を考察するに非らずば、決して理論に於て理解することも、實際に於て左右することも出来ない。何れの社會現象も同じ社會の狀態の他の各部分によりて大なり小なり影響され、故に又同時的社會現象の何れの他のものにも影響しつゝある各原因によりて、大なり小なり影響されるのである。要するに有機體の諸機官及び諸機能の間に存立すると同様な合致 (Consensus) が、社會の諸現象間にも存立する。そうして此の合致の存立する結果として、二つの社會は兩者を包み、又兩者に影響する一切の諸事情に於て、同様であり得るに非らずば、兩社會の一の社會現象の一部分が、他の社會の社會現象の一部分と、精密に對應すると云ふことは、偶然に非らずば、有り得ないであらう。如何なる原因も兩社會に於て、精密に同一の結果を産出しないであらう。かくて演繹的社會科學は、何れの原因の結果をも、普遍的な仕方にて言明する一の定理を設定せんとするのでなく、寧ろ如何にして、何れかの與へられたる場合の諸事情に對する適當なる定理を構成す可きかを、吾人に教へんとするのである。夫れは一般的に社會の法則を與へんとするのでなく、何れかの與へられたる社會の現象を、其の社會の特殊的諸要素或は與料から、決定する手段を與へんとするのである。

されば演繹的社會科學によりて構成され得る一切の一般的命題は、最も嚴密なる意味にて假說的命題である。其等の命題は假定的に結合されたる諸事情の一組に基いて立てられ、與へられ



たる或原因が、他の何等の原因も之れと結合しないと假定される場合に、其等の諸事情の中に如何に作用するであらうかを宣言するものである。そうして若し假定されたる諸事情の其の一組が、現實に存立する何れかの社會の諸事情から摸寫されたのであるならば、夫れに基いて立てられたる論結は其の社會に就て眞實であるであらう。但し夫れは其等の諸事情の結果が、斟酌されなかつた他の諸事情によりて變更されない場合に於て、又變更されない以上に於て云はれるのである。尙ほかゝる場合に、吾人は具體的眞理に更に一層近づかんとするに於ては、只具體化する諸事情の更に大なる數を考察に入れること、或は入れんと努力することによりてのみ、之を望み得るのである。

併し吾人が協力する諸原因の益々多くの數の結果を、考察に入れんとするに於て、吾人の論結の不確實性が如何に加速的に増大するかを考へると、吾人が依て以て社會科學の一般的定理を設定する諸事情の假設的結合は、あまり複合的なものでは有り得ないことが明らかに覺られる。其の結合の複合性が増大するにつれて、吾人が誤に陥る可能性は甚だ迅速に増長して、間もなく吾人の論結の價值が全く消滅せねばなくなる。されば此の種の研究方法は、一般的命題を收得する一手段として見れば、假令平凡の謗を受けても、社會的事實の一定の諸部類、即ち他の社會的事實の諸部類の如くに、一切の社會科學的諸原因によりて影響されて居ても、少なくとも主と

しては、只少數の社會科學的原因の「直接」な影響の下にある社會的事實の諸部類に限りて、適用されねばならぬ。

併し社會現象間に普遍的「合致」の存在するに係らず、又夫れが爲めに、何れの社會にありても其の文明及び社會的進歩の一般的狀態が、一切の部分的及び從位的現象の上に重大なる勢力を有するに係らず、社會的事實の諸種類が一般に、直接には又第一には、夫れ夫れ相異なる原因に依存し、かくて夫れ夫れ別々に研究されることが管に有益であると云ふだけでなく、更にそうされねばならぬことも亦同等に眞實である。是れ吾人の身體に就て、吾人が主要諸機官及び諸組織の各々の生理學及び病理學（各機官及組織が總ての他の機官及び組織の狀態によりて影響されて居るに係らず、又身體有機體の特殊な體質及び一般的健康狀態が、何れの特殊機官の狀態を決定するに於ても、其の局部的原因と協力し、且つ屢々之を左右するに係らず）を別々に研究すること、まさしく同様である。そうして右の考量に基いて、此處に社會科學的考究の、夫れ夫れ獨立して居るのではないけれども、併し夫れ夫れ明かに區別される諸分枝或は諸部の存立 (the existence of distinct and separate, though not independent, branches or departments of sociological speculation) が認められるのである。

ミルは以上述べ來りしが如き意味にて、特殊社會科學の論理的性質を一般的に規定し、又其の

科學的自律性を論述して居るのである。そうして其の詳しく批評は後に論述するが、此處に只注意したきは、彼が特殊社會科學の自律性を有機體の主要諸機官及び諸機能の各々の生理學及び病理學を、別々に研究すると云ふと同じ意味に解して居ることである。併し特殊社會科學の自律性を、只右の如き意味に解するだけで、果して其の自律性が確立されたと云ひ得られるであらうか。若し各特殊社會科學は他の特殊社會科學に對し、又社會學に對して、只右の如き意味にて區別されるだけに止まるならば、果して眞に科學的自律性を有すると云ひ得られるであらうか。コントと云へども右の意味ぐらひでは特殊社會科學の自律性を認めて居たことは疑はれない。かくてミルの見解とコントの見解との間には、實質上大した差異はないことになる。そうしてコントの見解を排して、ミルの見解を正當と認める多くの社會學者や經濟學者の所見は、つまりは皮相的なものであると云はねばならぬ。特殊社會科學が科學的自律性を有すると主張する以上は、其の自律性なるものは、ミルが考へるよりは以上の意味を有しなけねばならないのではあるまいか。尙ほ余はミルの特殊社會科學論には、重大なる矛盾が含まれて居ると思ふ。併し夫れは後に彼の見解を詳しく批評する場合に述べることゝして、此處には更に彼が特に詳しく論述して居る經濟學の概念及び方法に就て考察し、彼の特殊社會科學論の意味を一層具體的に究明したいと思ふ。

### (三) 經濟學の概念

ミルは彼の特殊社會科學論の主旨を、特に經濟學に就て詳しく論述して居るのであるが、今彼の論する處によると、此處に社會現象の一大部類があつて、夫れに於ては直接に決定する原因は、主として富の欲望を通じて作用するものにして、又夫れに於て行はれる主要なる心理學的法則は、より大なる利得はより小なる利得よりも選ばれると云ふ、熟知されたる法則である。云ふまでもなくかゝる社會現象の一大部類とは、即ち人類の產業的或は生産的行動より生起し、又其等の產業的行動の生産物の分配(暴力によりて影響されず、或は任意贈與によりて改變されない以上)が、依て以て行はれる人類の行動から生起する處の社會の現象の一部分である。そうして吾人は右の人性の心理學的法則及び主要なる外部的事情(其の法則を通じて人心の上に作用する處の)から推論することによりて、社會の現象の其の部分を、夫れが只其等の外部的事情にのみ依存する以上、説明し豫見することが出来るのである。かくて此の場合には、吾人は社會の他の外部的事情の何れのものゝ影響をも看過し、且つ又特に注目する其等の事情の始源を求めて、社會狀態の他の事實に遡ることも、亦其等の事情の結果と、他の何れの事情が交渉して之を打ち消し、或は變更し得る仕方を斟酌することも、敢てしないのである。そうして此の如くにして社會科學の

一分枝或は一部門が構成されるのであるが、夫れが即ち經濟學と稱せられるものである。

今社會現象の右の部分を他の一切の部分から分離して、之れに關する社會科學の一分枝或は一部門を建設するに至らしむる動機は、つまり其等の社會現象は少なくも先づ第一には、主として只事情の一部類にのみ依存して居ると云ふこと、及び他の諸事情が干涉する時でも、只右の事情の一部類にのみ歸せられる結果を確知することが、甚 込み入つた又困難な仕事にして、一先づ夫れだけを成就して置いて、後に他の諸事情の及ぼす影響を斟酌することが得策と考へられると云ふことである。

經濟學は只富の追求の結果として起るが如き、社會的狀態の現象を取扱ふものにして、そうして人間の他の總ての慾情或は動機を全く看過するものである。但し常に富の慾望に反抗する原理として認められるもの、即ち勞働の嫌惡及び現在の享樂の慾望だけは斟酌する。是れ此等の慾望は他の慾望の如く、只時々富の追求と衝突してくると云ふだけでなく、常に之れに伴ふて之れを邪魔し或は障害し、かくて富の追求の考慮中には不可離的に混ざつて居るからである。經濟學は人間を只富の獲得及び消費にのみ、努力して居るものとして考察し、若し右の動機が上に述べし二つの恒常的反對動機によりて妨げられる度合に於ての外は、人間の行動の絶對的支配者であるならば、社會に於て生活する人間は、如何なる行動の方向に推し進められるかを示さんとす

る。經濟學は右の慾望の影響の下で、人間が如何に富を累積し、其の富を他の富の生産に使用し、相互の合意によりて財産制度を裁可し、暴力又は詐欺によりて他人の財産を侵害することを禁ずる法律を制定し、勞働の生産能力を増加する爲めの種々なる工夫施設を採用し、競争の影響の下で契約によりて生産物の分配を定め（競争其物は一定の法則によりて支配されて居るから、つまり其の法則は生産物分配の最後の規制者である）、さうして分配の便を圖る爲めに貨幣、信用及び其他の一定の手段を用ひるかを示す。此等の行動の多くは實際には幾多の動機の結果であるが、併し經濟學は其の總てを只富の慾望のみから生起するものと見るのである。

夫より經濟學は、人間は其の性質の必然性によりて、總ての場合（上に述べし二つの反對動機によりて決定される場合を除いては）に於て、富のより少なき割前よりもより多き割前を選ぶべく、決定されて居ると云ふ前定の下で、上に述べし種々なる行動を支配する法則を研究する。云ふまでもなく如何なる經濟學者も、人間は實際上下に述べしが如くに造られて居ると、考へるほど愚なるものでない。併しそう見倣して研究し行くことが、即ち科學として經濟學が必然的にとらねばならぬ方法である。總て一の結果が幾多の原因の協力によりて生ずる場合に、其等の原因を通じて其の結果を豫見又は督制する力を獲得せんとするならば、吾人は其等の原因を順々に考察し、其の法則を別々に探究せねばならぬ。是れ其の結果の法則は、夫れを決定する一切の諸原

因の法則の合成果であらうからである。かくて社會に於ける人間が、彼の上に交叉して作用する諸種の慾望の下で、如何に行動するであらうかを判斷する爲めには、吾人は先づ其等の慾望の各々が只夫れのみ作用する場合には、彼は如何に行動するであらうかを學ばねばならぬ。恐らくは人間生活の行動にして、單なる富の慾望以外の何等の衝動の、直接影響をも亦間接影響をも全く受けないと云ふ様なものは一もあるまい。そうして富が主要なる目的物でない様な人間の行動に關しては、經濟學は決して其の論結が適用し得られるとは云はない。併し又富の獲得を主要な承認されたる目的とする人事の一定の諸部類がある。經濟學は只其等の人事の諸部類にのみ注目するのである。そうして經濟學が必然的にとる方法は、其の主要な承認されたる目的を、恰も唯一の目的であるが如くに假定して取扱ふことである。此の假定は總て同様に單純なる假定中、最も真理に近づけるものである。經濟學者は其の取扱ふ人事の部類内に於て、若し富の慾望が何れの他の慾望によりても障害されないならば、此の慾望によりて產出される行動はどんなものであるかを探求する。そうして吾人は此の仕方にて、何れの實行し得られる他の仕方よりも、其等の部類に於ける人事の實狀に一層よく接近し得るのである。併し如何によく接近し得られるとも、尙ほ實狀との距りがある。それで吾人は何れの特定の場合にありても、其の結果に影響すると認められる、他の種類の衝動の作用を適當に斟酌することによりて、此の接近を修正せねばならぬ。

併し此等の修正は、只少數の最も重要な場合（人口の原理の場合の如きもの）に於て、經濟學夫れ自身の考究中にとり入れられるだけである。（此の際には實際的效果の爲めに、純科學的結論の嚴格性が稍々損はれて居る。）そうして富の追求に於ける人間の行爲が、最小勞力及び克己を以て、富の最大分量を獲得せんとする慾望とは異なる、人間の何れかの性質によりても亦影響されて居ることが知られて居る以上、或は推定され得る以上、經濟學の論結は、他の原因によりて及ぼさるゝ影響の度合の正當なる斟酌によりて修正されるに非らずは、現實なる出來事の説明或は豫見に適用されることが出來ないであらう。

社會の與へられたる何の狀態に於ても、上に指示せるが如き性質の一般的命題からして、廣大な又重要な實際的指導が求め得られる。そうして社會の一狀態の諸要素から一の論結を引き出し、之を多くの要素が同一でない他の狀態に適用せんとするは、經濟學者に於て見る處の甚だ普通な誤謬であるが、しかも其の證論を順次に推し戻し、適當なる場處に新しき前提をとり入れることによりて、一の場合に役立てる論議の同じ一般的進行を、他の場合に役立たせることは困難でない。

例へば産業の生産物の分配の法則を、英國及びスコットランド以外の何處にも殆んど實行されて居ない前定（即ち生産物が完全に相互に區別される三階級、勞働者、資本家及び地主の間に分配され、そうして總て其餘の人々は自分の勞働、自分の資本、自分の土地に、彼等が夫れ夫れ收得せんとする如何なる代價をも設定す



ることを、法律上又事實上許されて居る自由行動者であると云ふこと)

（下で論議するは、英國經濟學者の一般の習慣であつた。そうして

彼等の論結は、英國の如くに構成されて居る社會には總て適合するが、然らざる社會に適用される時は、常に訂正されるを要する。其等の論結は只資本家のみが地主であり、そうして勞働者

は彼等の財産である處（奴隸國に於ける如く）では適用され難い。又國家が殆んど全體的地主である處（印度に於ける如く）でも適用され難い。又農業勞働者が一般に土地及び資本の所有者である

處（屢々佛國に於て見られる如く）や、又は只資本だけの所有者である處（アイルランドの如く）

でも適用され難い。そうして今日の經濟學者の一族は、一時的な材料から永久的な建物を築き上

げんと企て、社會の諸結構（其の多くは本來動搖するもの或は進歩するのである）の不變性を

前定し、恐らくは當人が丁度生活して居る特殊な社會狀態を除けば、社會の何れの狀態にも適用

し得られない命題を、恰かも普遍的及び絶對的眞理であるか如くに、殆んど無條件的に言述する

と云ふ非難は、屢々正當と認め得られるとしても、しかも其等の命題は、夫れが引き出されたる

社會の狀態に結び附けて考へられる場合には、毫も其の價值を損しない。又社會の他の狀態に適

用される場合でも、右の非難が證明して居ると思はれるほど、經濟學は不完全な又不満足な學問

であると考えられてはならぬ。經濟學の論結の多くは只局所的に眞理であるだけであつても、其

の研究方法は普遍的に適用し得られる。そうして代數方程式の一定數を解いた何人でも、同種の總ての他の方程式を困難なく解き得る如く、英國の經濟學を知る何人も、總ての國民の經濟學を

知るのである。但し彼は種々變動する前提から、同一の論結が引き出されると云ふ様なことを望まないだけの、常識を具えて居らねばならぬ。地主、資本家及び勞働者の三階級が完全な區別されて居る社會の狀態に於て、彼等が自由競争の下で、ける地代、利潤及び勞銀の決定する法則を、人知の達し得る精密の度合を以て把握した人は、誰でも上に述べた耕作及び土地所有制度の諸狀態の何れにありても、生産に參與する諸階級間に於ける生産物の分配を規制する、甚だ異なる法則を發見するに就て、何等の困難をも感じないであらう。

以上述べ來りし處によりて、ミルは經濟學の概念を如何に規定し、又如何なる意味に其の自律性を認めたか、隨ふて經濟學と社會學との關係を如何に決定したかは、かなり詳しく理解されると思はれるが、今其の眞價を評定せんとするに當つて、吾人は尙ほ考究して置かなければならぬ一問題がある。夫れは彼の性格學の概念である。既に述べし處によりて知られる如く、ミルは社會學及び特殊社會科學を包括する一切の社會科學の基礎として、性格學なる一の新しき科學を創設する必要を痛切に感じて居た。是れ彼の考へる處では、心理學と社會科學との間にはまだ一定の距離が存して居て、心理學を以て直ちに社會科學の基礎となすことは出来ないのだ、其の中間に兩者を繋ぐものとして性格學が、建設されねばならないからである。かくて吾人は彼の性格學の概念を考究した上でなくば、まだ彼の社會學論及び特殊社會科學論、即ち彼の社會科學論の全體を、深く其の根柢から理解したとは云はれない。それで余は彼の社會科學論を批判する前に、次號に於て彼の性格學の概念を考究したいと思ふ。